

MAFF ナビ いわて

東北農政局 岩手県拠点
令和7年3月

本紙は、農業や食料に関する情報をデータで提供し、農業関係者から消費者まで、多くの皆さんが農産物の生産・消費に興味を持ち・考えていただく材料として発信しています。

今回は、畜産にスポットを当て、中でも県内全域で見かけることが多い「牛」を取り上げることとしました。

岩手県の「牛」の状況をデータで見た後、現地レポートとして約70年に渡り酪農に取り組んでいる八幡平市の「(株)前森山集団農場」を紹介します。

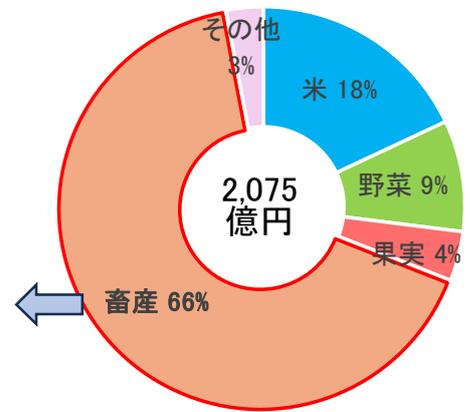
また、令和6年度に環境にやさしい肉用牛の飼育にチャレンジした、「岩手県立農業大学の奥寺星華さん」を紹介します。

1 岩手県の畜産の状況

令和5年の岩手県の農業産出額をみると、「畜産」が全体の3分の2を占めています。

畜種別に状況を比較すると、飼養している経営体数では「牛」が多く、金額では「ブロイラー」が高くなっています。

岩手県農業産出額(令和5年)



畜種別経営体数

畜種	経営体数
乳用牛	866
肉用牛	3,948
豚	80
鶏卵	67
ブロイラー	200

資料:2020 農林業センサス

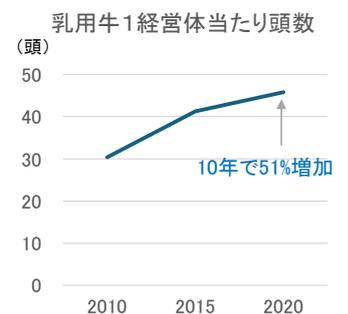
部門別農業産出額と全国順位

部門	金額(億円)	全国順位
生乳(乳用牛)	245	4
肉用牛	249	8
豚	388	7
鶏卵	249	15
ブロイラー	778	3

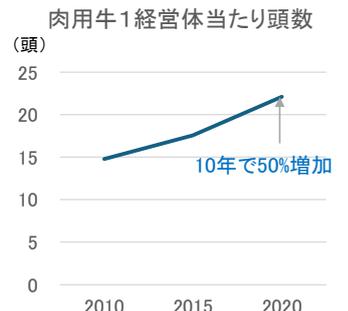
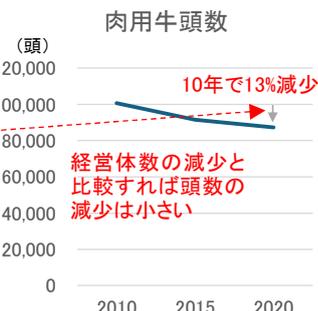
資料:令和5年農業産出額

飼養している経営体数の多い「牛」について用途別の状況をみると、「乳用牛」・「肉用牛」ともに経営体数が大幅に減少していますが、1経営体当たりの頭数が増加していることから、総頭数の減少はある程度抑えられている状況です。

<乳用牛>



<肉用牛>



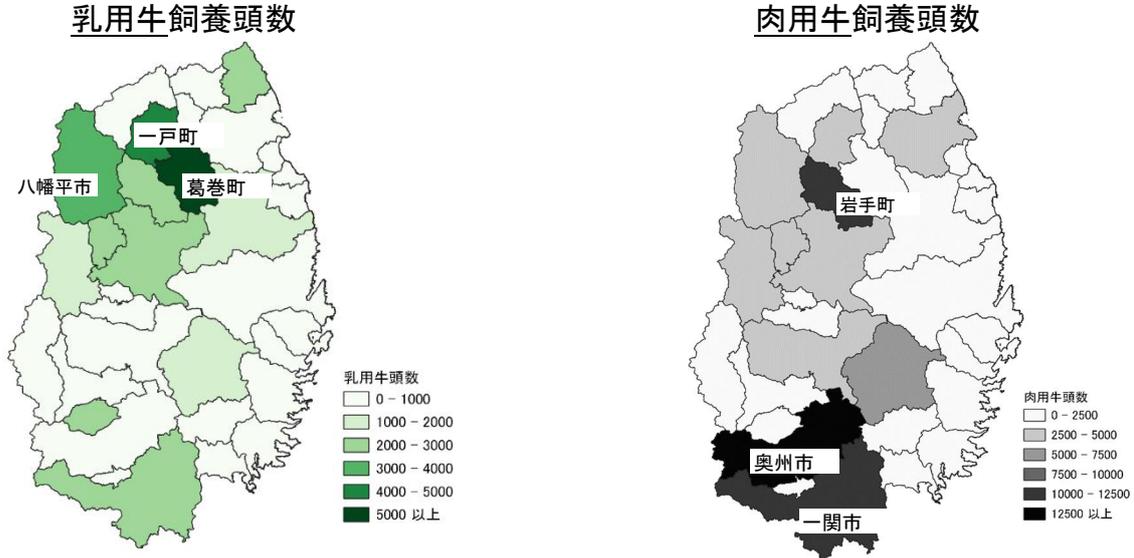
資料:2020 農林業センサス

2 地域の状況

(1) 市町村ごとの「牛」の飼養頭数

乳用牛と肉用牛の飼養頭数を市町村別にみると、乳用牛は県北に多く、肉用牛は内陸に多い状況となっています。

飼養頭数の多い上位3市町村は、乳用牛が葛巻町、一戸町、八幡平市で、肉用牛は奥州市、一関市、岩手町です。

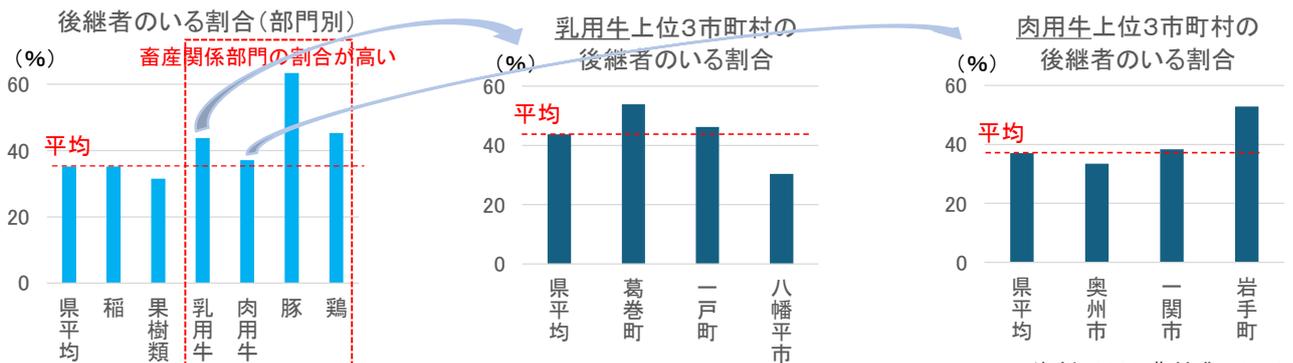


資料:2020 農林業センサス

(2) 畜産関係の後継者の状況

農業分野における後継者不足については、どの部門においても大きな課題となっていますが、畜産関係については、比較的、後継者のいる割合が高い状況となっています。

また、「乳用牛」と「肉用牛」の後継者の割合について、飼養頭数の多い上位3市町村の状況を見ると、「乳用牛」は、葛巻町は高いが八幡平市は低く、「肉用牛」は、岩手町は高いが奥州市は低い状況となっています。



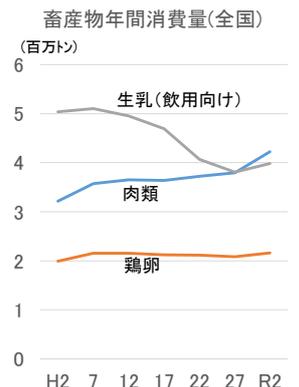
資料:2020 農林業センサス

3 畜産物の消費状況

畜産物の消費量をみると、減少傾向をたどっていた生乳(飲用向け)の消費が、平成28年以降は微増に転じています。

畜産県や稲作県と言われる岩手県にとっては喜ばしい傾向です。

岩手県の畜産活性化のために、牛乳や国産肉類等の消費拡大にご協力をお願いします！



資料:「食料自給表」を基に東北農政局岩手県拠点で作成

4 開拓地で共同酪農に取り組

< (株) 前森山集団農場 (代表取締役：大金廣夢) >

八幡平市前森山の東山麓に、開拓者が共同で酪農を始めてから約 70 年となる「前森山集団農場」があります。

今回（令和 7 年 1 月 20 日）、農場の代表取締役である大金廣夢さんと取締役の寺地輝美さんから、取組状況や課題等について、お話を聞くことができましたので紹介します。当日は、岩手大学の杉田准教授と学生 2 名も同行しました。



代表取締役：大金廣夢さん

----- 大金さん・寺地さんから -----

● 取組状況

前森山集団農場は、昭和 29 年に中国（旧満州）から帰還した人たちが前森山を開拓・入植し、昭和 32 年から乳用牛を導入したことから始まります。

入植当時、この地の標高や気象条件から作物の栽培は難しいと判断し、酪農を生業とすることに決めました。経営は当初から共同で行い、昭和 53 年に規模拡大を目指して農事組合法人を設立し、平成 28 年には将来を見据えて（株）前森山集団農場を設立しました。

農場では、育成から搾乳まで一貫して経営しており、粗飼料は自給を基本としています。牛舎には、600 頭（搾乳牛：300 頭、育成牛：300 頭）の牛を飼養しています。

牛のストレスを軽減し乳質を向上させるため、牛が自由に動けるフリーストール・パーラー方式の牛舎を県内でいち早く導入しました。また、牛群管理プログラムとして ICT（情報通信技術）を取り入れるなど、作業の効率化に繋がるものは積極的に取り入れるようにしています。牛の管理だけで言えば、現在の頭数を 7 人で管理できる体制としています。

最近では、牧草の生産量の落ち込みを補う方法として北海道の栽培方式を試すなどしています。



取締役：寺地輝美さん

● 課題

農業全体で言えることですが、人材確保が大きな課題となっています。作業効率化のため、牛舎の集約や牛の管理の機械化を進めていますがどうしても人が足りない状況です。

様々な方法でリクルート活動を行っており、東京にも企業説明会に行ってきました。

仕事柄、作業内容を習得するまで時間がかかるため、長期で来ていただける方を確保したいのですが難しい状況です。大募集中です！

● 今後に向けて

草地管理のノウハウを持っている職員が退職を迎える予定であるため、粗飼料の生産を他の事業所と連携することを考えています。

状況に応じた柔軟な取り組みが、長く経営していく上で大切なことだと思います。



質問する学生さん



農場の幻想的な夜空



トラクターと学生さん



牛舎（給餌）



従業員募集広告

様々な歴史を歩んできた前森山集団農場。言葉では言い表せない努力や試行錯誤を繰り返してきたのだなと感じました。

また、新たなことにチャレンジする意欲も感じさせられました！

5 環境に配慮した畜産に向けた取組

<岩手県立農業大学校（奥寺星華）>

岩手県立農業大学校では、環境負荷低減の研究を行い、第1回みどり戦略学生チャレンジにおいて「東北準グランプリ」を受賞しました。

みどり戦略学生チャレンジは、農林水産省が2021年に策定した「みどりの食料システム戦略」の取組の一環として行ったもので、将来を担う若い世代の大学生や高校生等が、環境に配慮した取組を実践する機会として実施され、令和6年度は、全国で402チームが参加しました。

同校では、取組テーマを「和牛繁殖雌牛へ海藻給与がメタン削減や一般健康状態等に及ぼす影響」として、牛のゲップによるメタンの発生を岩手県の主要海産物であるワカメで抑制しようとする研究を行いました。

海藻によるメタン抑制の研究は、近年、他で進めているところもありますが、ワカメの活用は全国でも事例少ないため、試行錯誤しながら進めたとのこと。

研究方法としては、ワカメの発酵液を作り、希釈濃度別に給与し効果を測定する方法です。発酵液作成だけで5週間、その後に給与、最後に分析、と各工程に相当の作業期間を要することを考えれば、限られた期間内での取組は大変だったと思います。



ワカメ発酵液

また、奥寺さんが研究の全過程に深く関わったとのこと、その行動力に驚かされました。一方で、牛が美味しく食べることや牛の健康を考慮して研究を進めたとのこと、単に研究のためではなく、牛に対する優しさを持って接したことが感じられました。

研究成果については、取組期間が短かったこともあり、本人は若干不満が残っているようでしたが、見せていただいたデータからは効果が表れていると思いました。

奥寺さんは、一連の取組を通して「今回の研究は自信に繋がりました。また、取り組んだことを評価していただいたことは、これから社会人になる上で励みになります。」と話していました。

最後に、「牛さんにワカメ発酵液を美味しく飲ませる方法も研究すればよかったです（笑）」と、笑顔で奥寺さんらしい牛を思いやるコメントもいただきました！



牛の健康チェック



データ確認



必要な資材は工夫して手作り



(左から)安田先生、奥寺さん、竹澤校長

本紙は、将来の農業の担い手、労働力不足解消に向けた取組について考える材料としてご活用ください。また、当拠点では農林水産データの活用支援を行っています。遠慮なくご相談ください。

<ニッポンフードシフト>

「食」から「農」について自ら考えていただくことで、将来の「食」「農」を守っていく取組です。

主に、次世代を担う若い世代をターゲットとして情報を発信しています。

<https://nippon-food-shift.maff.go.jp>



<みどりの食料システム戦略>

食料・農林水産業の生産力向上と持続性の両立をイノベーションで実現する「みどりの食料システム戦略」に取り組んでいます。

<https://www.maff.go.jp/j/kanbo/kankyo/seisaku/midori/index.html>



東北農政局岩手県拠点
岩手県盛岡市盛岡駅前北通1-10
019-624-1125

MAFF